

Ⅲ．学校現場の問題

学級づくりにおける「教師理解(教師の語りかけ)」 の果たす役割

— 学級通信と学級づくりとのかかわりについて —

茨城県古河市立古河第一中学校 小 倉 真

1. はじめに

中学生、彼らは小学校という小さな未熟で従順な世界から、新しい自己を求めて中学校という大きく広くはばたく世界へと入ってくる。それは人間の成長の中で大きく変化する時期でもある。

学校生活にも慣れ自分のあるべき立場が分かりつつある中学二年生にとって、何か中途半端で行動に自信がなく、しかも自己主張の激しくなる精神的に不安定なこの時期に必要なものは何だろうか。生徒同志、そして生徒と教師との人間関係にとって大切なものは何だろうか。

教科担任制により担任教師との接触の場は、限られてくる。生徒同志においても部活動仲間を中心に小グループ化しやすくなり、学級が一つの集団としてのまとまりに欠けてくる傾向もある。こうした現状の中で学級担任として学級づくりをしていくことは大変難しい。

例えば、土足で昇降口を上がってくる生徒がいる。理由を聞くと昇降口が汚れていたからだという。靴下が汚れてしまうのでそのまま上がってしまったのだ。はきかえる必要はないのか、ともう一度問うても、汚れているのではきかえないという。土足で上がる生徒がなくなる限りこの生徒は、この行動を繰り返すことだろう。自分もこの昇降口を汚している仲間だと考えずに、他人のせいにする自己中心的な考え方は、心の貧しい証拠でもある。何とかしてきれいな昇降口にしなれば、と思う他者への思いやりに似た感情は育てられないだろうか。土足で上がった罰としての清掃をこの生徒にさせることだけでは、問題は解決できそうにもない。

何らかの方法で意図的、計画的に教師の語りかけを通して、生徒にかかわっていき生徒の心に食い込んでいく手段はないだろうか。

そこで、教師の語りかけを綴っていく「学級通信」を学級づくりのひとつの柱とした。生徒を知り、生徒に知られていくということを大切にしたい。教師が自己を語り生徒に理解されていく、そうして人間関係を深めていこうと考えた。どのように教師の考え方や感じ方を生徒に伝え、訴えていくかということが実践上考慮すべき点であるが、そのことをより効果的に行なうためにはどうしたらよいかを中心に以下述べていくことにしたい。

2. 指導の実際

(1) 教師の語りかけを綴った担任日記「つぶやき」の実践

学級通信として学級の様子や生徒の実態や教師の願いその他の学校生活にかかわる出来事等を書き記し、提示するといった形式で綴り読み合うことは、生徒同志または教師との人間関係を深めより良い関係を生み出す。更に、家庭と学校との連携を図る上でも効果的である。

教師が何らかの形で書き綴ったものは、それが継続すればするほど学級の歴史を物語り、生徒の心に残るものは大きい。そこで、生徒の心に残りそれが生徒の心を揺さぶるある種の感動として、受け止められるものとしての心と心の通信を果たす学級通信はどうあるべきか、ということ考えた。

あくまでも教師対生徒の人間関係を深めるための通信にしようということをも前提にした。対生徒へのメッセージと言ってもいいそういう通信にしたいと考えた。だから、その結果として、家庭とのひとつの連携が図れることになれば幸いであると考えた。中学校では、生徒は自分に都合のいい印刷物は持ち帰るが、そうでないものは捨ててしまうという場合が以外に多い。小学生でも中学生でも自分の通信として受け止め、捨てがたいものにするには、本人の作品を取り上げて書くことである。(中学校では、この点教科担任制であることから難しい。)しかし、生徒の作品ばかり取り上げていては教師の考え方や感じ方、引いては生き方を綴る通信には、なり得ない。

そこで、できるだけ教師の意図的にそして計画的に生徒への指導を重視しようとして、担任として学級づくりに貢献すべき通信となるように、本校の道徳と学級指導の年間計画に関連づけた生徒向け学級通信「担任日記つぶやき」の年間計画を立てた。

昭和62年度 2-1 担任日記「つぶやき」年間計画

月	内 容	学・指	道 徳
4	・新学年 ・目標 ・巡り会いについて	○	
5	・友情 ・健康そして体力		◎
6	・働くこと生きること ・食べること	○	
7	・時間の使い方(自由であること) ・学習と計画	○	
8	・遊びとは? ・季節の変化		◎
9	・行事への取り組み(運動会へ向けて) ・勉強とは?	○	
10	・読書について ・芸術 ・趣味	○	
11	・文化とは? ・男女のありかた	○	
12	・規則について ・年の終わり ・日本のしきたり		◎
1	・新年と信念 ・家族と自分		◎
2	・新聞記事を読む ・真理とは?		◎
3	・反省すること飛躍すること ・進路と人生	○	

* あくまでも計画であって、日常生活の中から生徒へ訴えたい内容を見つける。

しかし、この指導計画にしばられることなく、しかも計画的に綴っていこうと考えた。
さて、実践後に書かれた内容を以下に述べてみる。

- 話し合い活動後の感想
- 勉強するということについて
- 清掃への雑感
- 本を読んだ感想と生徒の作品
- 道徳の授業の感想あれこれ
- 学級の志気を高めるために
- 学級の出来事から発見したこと
- 班ノートに書かれたことへの感想、意見
- 友達の大切さ
- 読書の意義について
- 看護当番の目標と教師の考え
- 校内音楽会の感想文から気になったこと
- 家庭学習を考えよう
- 学年フォーラムから考えさせられたこと
- 「二度とない人生だから」の詩の紹介と感想
- 学校長の話から印象に残ったこと
- 新聞記事から拾い出した文章
- テレビのスポーツ番組を観戦して思ったこと
- 新年の抱負から
- 学級指導後の感想文あれこれ
- 春分の日になんで
- 進路について
- 学級通信のアンケート集計結果から

このような題材をもとに綴ってきたが、その中で○印は他の先生方から「なるほど」とうなずいてもらったり、ほめてもらった内容である。また、生徒は、自分の作品が載ったことへの喜びを示したものであった。

そうすると、私が意図した「教師理解」ばかりを強調しすぎるとなんとなく飽きられる。しかし、生徒の身近な事件やかかわりをもつ内容には興味を引く。ということがいえるので、生徒の側に入りこみながら、教師の考えを表現していくという方法が綴っていく上で大切であるといえる。

そのためには、生徒の良さを見つけることである。ややもすると、（時にはそうなるが）生徒の良くない点に目を留めてしまい、それを正すための教師のお説教的通信になってしまう。注意されることは、確かに良くないことでも素直に聞かないのが今の中学生の全体的な傾向でもある。だか

ら、生徒の行為の良さに気づかせることがよい。それには、教師が生徒の良さをいろいろな角度から探していかなければならない。弱点を見つけやすことは簡単だが、少しのことにも良さを認めほめることはなんと大変なことか。

生徒の行動には、自分にも気づかぬ良さが隠れている。それを発見していくということ。つまり、生徒を理解していくということが「教師理解」としての第一歩であるような気がする。教師の考えや思いを生徒に知ってもらおうということは、受け止めてくれる側の心の状態をこちらで捉え、その上で投げかけるということの積み重ねであろう。そうした営み全体が学級づくりとなる。学級づくりをするための糸口となる学級通信として書き綴ってきたつもりはあった。

例えば、次のような通信を出した。

「うれしかった。何てことない出来事ではあったが、心に残ったことだ。それは、放課後、日直当番のNくんが、当番の仕事を終え帰ろうとした時、最後に教室の電気を消そうとした。私は書きものをしていて。彼は一言、「消してもいいですか。」とたずねた。それで、「いいよ。」と答えたのだが、私は全部消されてしまうのだろうと思っていた。消されたら書きものを終了してしまうと考えていた。パッと教室の電気が消えた。暗くなったが、窓側の私の机の上の蛍光灯は消されずについている。私が書きものをしていることを気づかったためだろう。Nくんは、「さよなら」と帰ってしまったが、私は何だかほっと暖かい気持ちを感じた。電気が消されてしまうだろう、という予想に反したからであろうか。書きものが続けられたからであろうか。どちらでもない。私の存在を考慮してくれたNくんの行為が、なんとも暖かいものを感じたのである。ちょっとした気づかいある行為は、生活の潤滑油だ。私は、一日の疲れがふきとんだ気がした。ありがとうNくん。

……相手の身になって考えることはむずかしいことだ。その人のためにしてあげたと思うことでも、相手は余計なお世話だと考えることもある。ひとことの言葉かけでも相手との誤解を生ずることもある。しかし、だからといって考えすぎるのはよくない。前向きな気持ちで他者を理解していこうという積み重ねを続けていこうと思う。思いやり、それは私たちの素漠とした生活にうるおいをもたらすものだと思う。」

通信として文字に書き記し、残していくと学級の歴史として積み上げていくという記録となる。もちろん、教師の語らいだけでも内容によっては、生徒の心に残るものもある。私は、たいてい帰りの会の教師の話の時に静かにゆっくりと読んで聞かせる。書いたものを読みあげるとは、余計な語らいを省くこともできる。率直に教師の考えが伝えられるようでよいと思われた。

(2) 生徒自らが学級意識を高め合う「班ノートだより」の実践

「友だちの意見に耳を傾け、ともに考え合い、いかに生きるかという問題に考えをめぐらそう。」

と生徒に訴え、班ノートを次のように書かせた。

「班ノートに書く内容は、その班の活動や話し合いの記録を中心にして、

- ア. 自分自身のこと
- イ. 友人のこと
- ウ. 学級生活についての意見、提案
- エ. 学級担任に聞いてほしいこと
- オ. その他（班の人たちの作品など）

のことで、感想文に、または意見文に、または手紙形式で表現していくようにしよう。

班のみんなで書き合い、考え合い、励まし合うということは自分にはない一面を友だちから学び、友だちの知られざる一面を理解することができる。このことは自分だけでなく、みんなも悩んでいるのだという共通感を得ることもできるのです。

班の生活をより質の高いものにするために、「さあ書き合っていこう。」と強く訴えた。

こうして書かせた班ノートへの赤ペンが「教師理解」の出番となる。どんな日記に対してもその生徒の姿を思い出しながら朱筆した。その生徒の心情を理解しようとした。赤ペンは指導するためよりも共感することに心がけた。共感することから、教師の感じ方や考え方を表現していった。

この積み重ねの中から、「班ノートだより」として公表してもよいものを記事にした。前述した「担任日記つぶやき」と異なり、このたよりは生徒の生の声をそのまま書き綴ったもので、そこに教師の一言感想を載せてたよりとしてまとめた。

これに対し「先生になやみや意見などが伝えられとてもいいと思う。でも、らくがきされるのはいやだった。」とか、「一日の自分の反省ができていいと思う。その人の思っていることがはっきり出るのでいいと思う。班ノートだよりで取り上げてもらった人を見ていると、いい話がのっていたりしていいと思った。」という感想や、「他の人の思っている事や、出来事なども分かるし、その時の気持ちなど書きのこしておける。」とか、「みんなこのごろ楽しいことばかり書いてあって、読んでるとたのしい。先生が書いてくれることばも毎日読んでいる。これからもずうっと書いてほしいと思います。」などの生徒の反応を知ることができた。

自分は、この学級の一員であり、学級づくりにある意味で貢献しているのだ、という学級意識を高め合う一つの方法としてこの「班ノートだより」を活用することをねらいとしてきたが、そのためにも、より多くの生徒が班ノートに意欲的に書き、内容に生徒の本音が表現されていくように配慮していかねばならない。生徒同志が本音を読み合い、知り合う場として「班ノートだより」が活用されていけば、学級への所属感が高まっていくにちがいない。

「班ノートだより」には、学級会活動の生徒の自己評価のための感想文も載せた。そのことで学級会への意識づけや参加態度などを互いに知り合えるように工夫した。自己中心的で暴力的な女子生徒Tは次のような感想を書いたので、さっそく取り上げて記事にした。

「私たちの班は、男子は運動しんけいがあんまりいい人がいませんでした。だけど、みんなの助

け合いがあったからそんなに悪い成績はとりませんでした。楽しくけがなくできたのが一番よかった。それに、みんなのいい所や悪い所がわかったのでよかった。自分の反省としては、みんなにあまり打たせないで、私ばかり打っていたので、これからの試合の時はみんな平等にやっていきたい。」（学級スポーツ大会“フットベースボール大会”を終えての感想より）

これらの感想に対して、教師の一言感想を以下のように述べた。

学級会は、話し合いから実践活動までみんなでやりとおし、まとまりのあるより良い学級にするための時間です。ひとつの学級行事をやり終えて、みんなの心に残ったことを反省し、これからの活動のために役立てて下さい。「クラスのみんでやるということは、すごく楽しいです。」という感想を生かし、創意ある提案を期待しています。学級会は、みんなの力でやり遂げようとするところに意義がある。

「班ノートだより」を10号ほど出した頃であろうか。「自分たちで班ノートだよりを書いてみたい。」と学級委員のYが言ってきた。私は、「教師のひとことコーナーだけは書かせてほしい。それ以外は、すべてまかせるよ。班ノートを読んで記事としてよいと思うものを選んで書いてみなさい。」と言って原稿用紙を渡した。その日のうちに半裁の原稿を仕上げるのに何時間か費したが、カットも添えて「班ノートだよりNo.12」を完成した。私は、この方法は大変素晴らしいことだとして、係の生徒をほめた。その後、「今までで一番長い班日記」とか、その他いくつかのたよりに書いてくれた。こうしたことがきっかけとなってか、班ノートに書かれる内容が豊富になり、質的にも高まってきたように思える。

生徒自身の文章を生徒の手で取り上げ、生徒同志で読み合うことは、生徒間の心の交流が密になると考えた。更にたよりに対する親近感も高められていくと思われた。

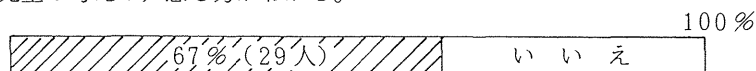
3. まとめと課題

(1) 担任日記「つぶやき」の実践から

アンケート結果をまとめる。（昭和62年12月調べ、生徒43人）

1. 「つぶやき」を読んで、あなたはどう思いますか。（いくつ選んでもよい）

ア. 先生のお考えや、感じ方がわかる。

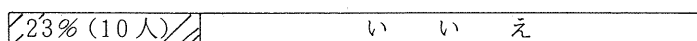


イ. 学級の出来事や様子がわかる。



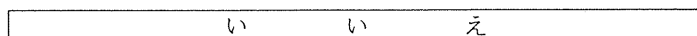
ウ. 友だちの考えや感じ方がわかる。

100%



エ. 読んでもよくわからない。

100%



2. 「つぶやき」を家の人にも見せていますか。(ひとつだけ選ぶ)

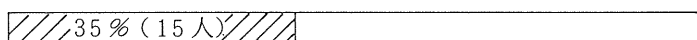
ア. いつも見せている。

100%



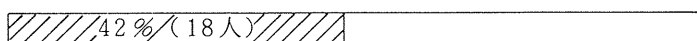
イ. 時々見せている。

100%



ウ. 自分だけで読むので、見せていない。

100%



3. 書いてもらいたい記事として、何かありますか。

- 日本の政治について
- ぼくらが何かいいことをした事
- 先生の子どもの頃
- 学級でのいろいろな事件など
- 学級の出来事や月の予定など

4. 「つぶやき」を読んで、何か感想があったら書いて下さい。

- 先生の考え方や感じ方、みんなの考え方や感じ方がよくわかった。
- クラスのこととか、自分の知らないことがわかったりするのよい。
- お母さんがいつもよろこんで読んでいる。
- 「つぶやき」という題、風流で感動した。

担任の考え方や感じ方を分かってもらえたことは、意図した通りであった。しかし、その結果、自分たちの悩みや問題等をうちあけて相談に来たという生徒は見られなかった。記事の内容でも「先生の子どもの頃」など、もっと取り上げてやりたかった。意図的ではなく何回か語ったことはあったが……。

また、年間計画を立てて書くことにしたことは、忙しい毎日の生活の中にあっては必要なことだと思えた。たとえ計画と実践が一致しなくとも。

(2) 「班ノートだより」の実践から

「班ノートだより」をどう思うかについて、「いろんな人の意見が聞けていいと思う。あと班ノ

ートだよりはもうちょっと計画的に出してほしいと思う。(一週間に一回とか、特別な時は臨時号を出すとか)」という感想が寄せられたが、そのためにも、係の生徒を活用していくことが更に望ましいと思う。

学級意識を高め学級への所属感をより強く生徒同志が持つことができれば、というねらいから始めた「班ノートだより」だが、そこに次のような記事が書けるということは、教師にとってこの上ない喜びに思えた。書き綴る意欲を与えられるものだった。

「ぼくは、班ノートだよりを書くとなんとなく気持ちがいい。なぜかというと、ふだん静かな人でも書いたことをみんなが読むと、その人の気持ちや考えがわかるからです。もっとみんなの気持ちや考えを知って、みんなから「いい学級委員だ」と言われるようになりたいです。しかし、二学期もあと少しで終わりなので残念です。できることなら三学期もやりたいです。……略」

「出る杭は打たれる」という諺があるが、今の中学生にとっても同じ状況にあると思う。目立つことがある種のいじめの対象となることは否めないし、進んで良いことをしようとする生徒を嘲笑ったりすることも事実としてある。しかし、そういう状況にあっても、このような日記が班ノートへ書けるということは、学級の雰囲気の中にこうした生徒を受け入れるものが出て来たと言える。(しかし、学級の問題は絶えることはないが。)

これまでの学級通信は、あくまで生徒の心に食い込んでいく手だてとしてのものではあったが、生徒から更に家庭へとつながるパイプ役を果たすものでありたい。学級を支えているのは、教師や生徒ばかりでなく、家庭もその大きな役割を担っているのだから。今後の大きな課題としたい。

2-5 班ノートだより

8812.10

No.15

五組というクラスには、いろいろな性格をもった人がいるので"いいです"!!

12月8日(木)

ほくは、班ノートだよりを書くとなんとか気分がいい。なぜかという、ふたん静かな人でも書いたことをみんなが読むとその人の気持ちや考えがわかるからです。もっとみんなの気持ちや考えを知って、みんなから「いい学級委員だ。」と言われるようになりたいです。しかし、二学期もあと少して終わりのので残念です。できることなら三学期もやりたいです。ほくは生まれつき人の前に立ってやるのが好きです。そして、小倉先生のいった通り、えんの下の力持ちになりたいです。

あと、班長会議の話し合いをもっと内容の深いものにしたいです。五組というクラスには、いろいろな性格を持った人がいるので"いいです"。

今は、選挙管理委員が楽しいです。みんなは大変だからやりたくないと言いますが、ほくは自分のやっている仕事に自信があるので"楽しいです。これからも仕事に勉強にがんばりたいです。"

最後に、「なんでもBOX」に入っている紙が少ないので、みんなにがんばってほしいです。班の人はおもしろいです。
おわり。 (山田一樹くん)

担任

ひとこと

なかなか意欲的な日記でした。そして、この学級の特徴をよくとらえていると思う。「えんの下の力持ち」的なことは大変です。でも、どんな立場であれ、こういう経験は、あると思う。学級のため、自分のために頑張りたい。 たれも

ぼくたち わたしたちの
 学級自慢発見らくがき帳
 2-5 氏名(南部由紀)

私たちのクラス自慢できることば 2つあります。	
1つは 学級目標が1つ達成できたことです。	
もう1つは 学級! クレーションが他のクラスより90点ということば。	
学級会。やり方は、けいごくはなして、他の先生に見てもらったり	
早く学級会が進められるように、班長会議を聞いて話し合いました	
結果、2回学級レクができました。始めは、フットパス大会次に	
映画鑑賞(メトロポリス)を行いました。	
学級レクが90点ということば、最初の目標「男女協力して楽しくみんな	
クラスある。が達成できている。しゅん。と。思。い。ま。す。	
早く今の目標「特別良い生活をする」が達成できて	
自慢できることば、小えるといっています。	
その場面を絵にかこう。	* 教師の一言 すばらしい学級自慢を 発見にこねられた。 先生にもお礼が下く 思いました。 これから、みんな学級 に存心く努力にいきます。

2-5 班王ノートだより 88.11.14 No.12

ベートーベンは 耳がきこえない
のに こんな曲をつくれるなんて
すばらしい。

♪—— 11月18日(金)

今日は、朝から雨だ。雨はきれいじゃない
けど晴れがいい。雨のせいかさむく感
じる。1日くもりはいやなもんだなあ。
今日は、音楽の時間に、ベートーベンの
レコードを鑑賞した。耳が聞こえない
のに、こんな曲をつくれるなんて、
すばらしいなあと思った。
そこで、中間テストの結果がきた。
もっとがんばりたいと思った。

END

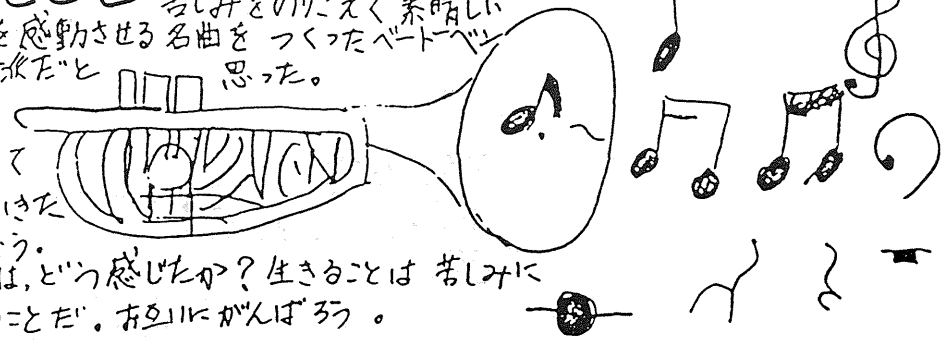
(鹿倉美智子)

ひとこと

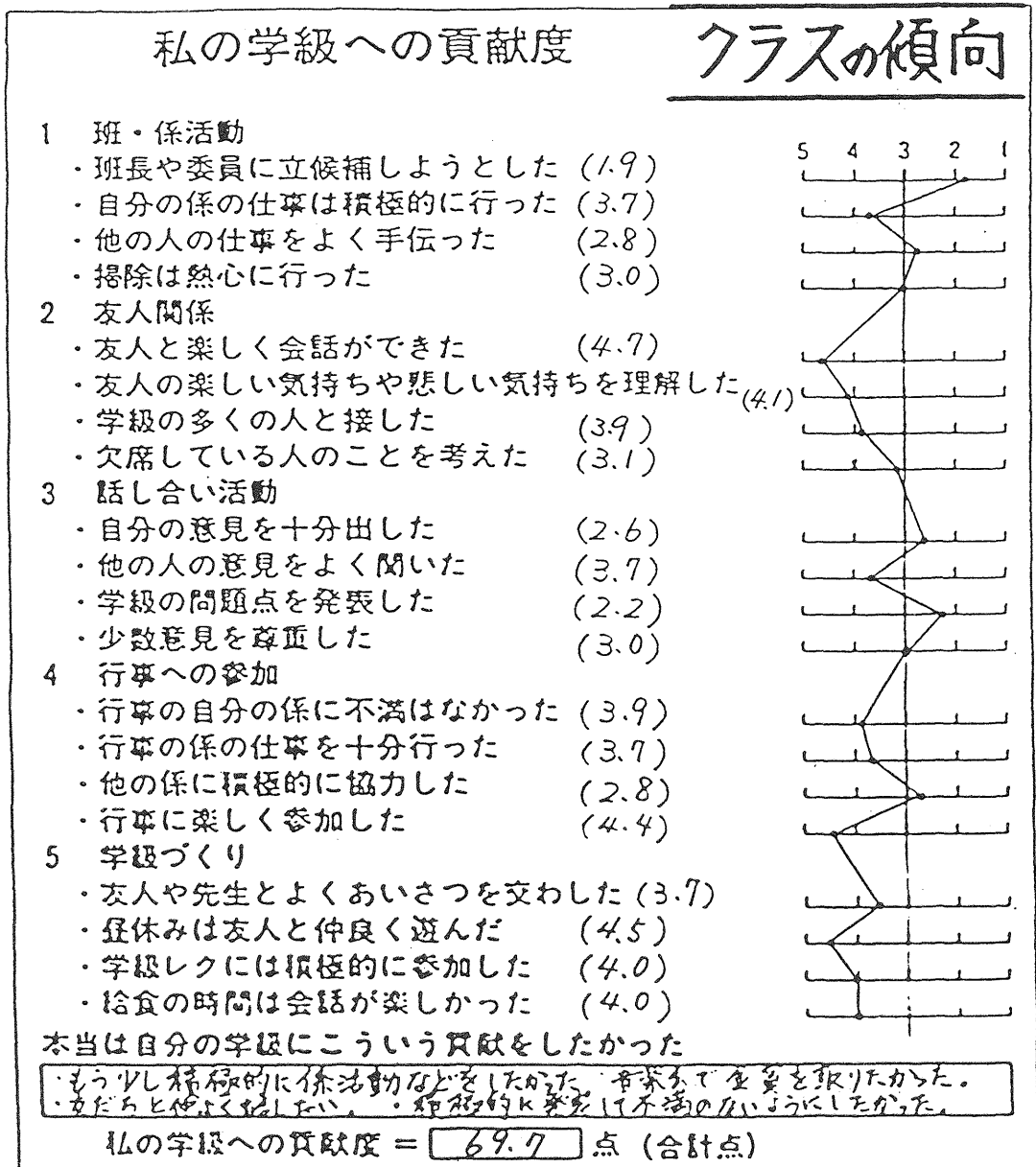
苦しみをのりこえて素晴らしい
人の心を感動させる名曲をつくれたベートーベンは、立派な天才だと思った。

先生も
みならう
生きていき
たいと思

みんなは、どう感じたか？ 生きることは 苦しみに
耐えることだ。お互いにかんばろう。



よりよい学級づくりをめざして 学級への貢献度をチェックしました!!



2-5 男19, 女24 計43名 (欠席1) S63.11.19 調査